國學院大學学術情報リポジトリ

ナシ族トンバ経典『ドゥとスの戦い』の翻訳と注釈（２）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-24 キーワード (Ja): ナシ族, ナシ語, トンバ経典, 翻訳, 注釈 キーワード (En): 作成者: 黒澤,直道 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000081

ナシ族トンバ経典『ドゥとスの戦い』の翻訳と注釈（２）

黒澤　直道

1. はじめに

本稿では、前号に引き続き、ナシ族トンバ経典『ドゥとスの戦い』の第十一葉から第二十四葉までの翻訳と注釈を示す。凡例については、前号の第二節を参照されたい[1]。

2. 翻訳と注釈

〔第十一葉〕

白黒の接する境の地に着くと、銅のかけらと鉄のかけらを後ろに向けて敷き、銅の刺と鉄の刺を後ろに向けて挿した。ムルドゥズの地へ帰ってきた[2]。三日目の朝になり、スのアセミウァが、白い剣先の矛を担ぎ、鉄の頭の黒犬を後に連れて、太陽と月は設えず、盗んではいけないものを盗み、隠してはいけないものを隠したと言って、ドゥゾアルの後を追ってきた[3]。白黒の接する境の地に着くと、スのアセミウァは、銅のかけ

---

[1] 本稿は日本学術振興会科学研究費補助金「ナシ学確立を目指した歴史史料の基盤整備と前近代ナシ族社会経済史の研究」（基盤研究Ｃ（18K01018）、研究代表者・山田勅之）による研究成果の一部である。

[2] ①では、「ムルドゥズは夢を見て、良い夢だ、と。ドゥゾアルがドゥの地に着くのを夢で見た。」とする。②では、「チュチュゥジムは、夢を見て良い夢だ、と。ドゥゾアルはドゥの地へ帰ってきた。」とする。

[3] このくだりは、テクスト間の差異が大きい。①では、「スの息子アセミウが、太陽を盗み月を盗みに来た。ドゥのパ神の兵とサ神の兵が追い、スの息子アセミウは、白黒の接する境の地で、銅の坂、鉄の坂で、組んだ銅と鉄に刺さって死んだ。」とする。盗んだ主体がドゥゾアルからアセミウに逆転し、盗んだものは太陽と月になっている。②でもほぼ同様に「スの息子アセミウァが、後に太陽を盗み、月を盗みに来た。ドゥのパ神の兵とサ神の兵が追い、スの息子アセミウァは、組んだ銅と鉄で転び、銅の刺、鉄の刺に刺さって死んだ。」とする。ちなみにトンバ文字では、アセミウァが鎌［同音の「盗む」を意味する］を持っている文字が描かれているのみなので、盗む主体はどちらとも解釈し得る。また、③では「スの息子ンガセミウは、明け方近くに、ドゥゾウァルがいないのに気付き、スの黒犬を後に連れ、後を追って来た。白黒の接する境の地で、組んだ鉄と銅に刺さって死んだ。ムルドゥズが言うには、夕べは三つ良い夢を見た。ドゥの息子がドゥの地に着いた夢、スの息子が白い太陽を盗

らと鉄のかけらの上で滑り、銅の刺と鉄の刺に刺さり、そこで死んだ。ドゥゾアルはアセミウァを殺した。ムルドゥズの一代、スの頭と骨を取り出し、ガ神[4]の角笛にすることができない。スの心臓と肉を取り出し、ガ神を祭る[5]ことができない。スの血を取り出し、ガ神の穢れを洗うことができない[6]。うつ伏せに地に埋めて、埋めたところに糠を撒き、糠には溝を引き、溝には水を流し、こうして埋めた。スの犬、スの人が分からないようにした[7]。昼には矛の柄の太さの煙が天に連なり、夜には鶏の冠(とさか)のような炎が天を照らした。ムルドゥズは心穏やかでなく落ち着かない。ムルドゥズは、あらゆる者に溝を整え水を引かせた。ニゼ[8]、烏(からす)、穴熊に、溝を整え水を引かせた。烏は溝を整えず、人煙の出たところに行き、夜に棲む場所を探しに行った[9]。飛ぶ烏の黒烏は、泥池を三度足で踏み、ムルドゥズのところに言いに行った。足に泥が着き、手に血が付いた、と。ニゼは溝を整えず、穴熊は水を引かず、と。

めなかった夢、ンガセミウが組んだ銅と鉄に刺さった夢だ、と。朝になり、ドゥゾウァルは、銅と鉄を組んだところに見に行った。スの息子はそこに挿さって死んでいた。……」と、さらに描写が詳しくなっている。

4 原文は、Gga。戦いの神、勝利神。前号注 33 に同じ。

5 原文は chul'a(lei)bbei だが、一般には chulbabbei（祭る、緑葉の香を焚き祭祀をする）である。chulba はチベット語 ཚལ་བ（祭祀、祭る）の借用、bbei は「～する」の意味。

6 この部分は、①・②・③では逆の意味になっている。①では「仇の頭を斬ってガ神を祭る。仇の骨を取り出してガ神の吹く角笛とする。仇の血を取り出してガ神の穢れを洗う。」とし、②では「仇の頭を焼いてガ神を祭る。仇の骨を取り出してガ神の吹く角笛とする。仇の血を取り出してガ神の穢れを洗う。」とし、③では「スの頭をガ神に捧げ、スの心臓の血でガ神の薬とし、スの骨を斬ってガ神の吹く角笛とする。」とする。

7 ①・②では、「ある日になると、ムルドゥズは心穏やかでなく、スの亡骸を鼠の亡骸のようにし、持って土に埋めた。土には溝を掘り、溝には水を流し、水には糠を撒いた。」とする。溝・水と糠の順が逆になっている。③も、これとほぼ同様。

8 原文は、ニゼ（nizzeil、nizzeiq）。漢語では「風を吸う鷹」と訳される。風に向かって羽ばたき、空中で止まって風を吸っているように見えることからこの名がある（李霖燦 1972,p.60）。

9 この文における reesvl を、④では、「酒-探す」とするが、⑤では「道-探す」に修正している。他のテクストでは、烏が儀礼の供物を荒らすことから、「烏に溝を掘らせても溝を掘らず、煙の出たところに行き、赤い肉が捨てられたところ、赤い血が捨てられたところに見に行った」（①・②）、「烏に溝を作らせると、供物を置いたところ、煙の出るところに、烏は見に行った。」（③）とする。他にも「烏は……太鼓を打つところ、板鈴を揺らすところ、赤い皮を剥がすところで守り棲みついた。」というテクストもある（和開祥・李英 1999-2000）。

〔第一二葉〕

ムルドゥズよ、本当の三つのことを、あなたは分かっていません、と[10]。ムルドゥズは、ニゼに水をやってはいけない、と。追いやって白い風を飲むようにした。穴熊に水をやってはいけない、と。追いやって舌先で舐めるようにした。ニゼと穴熊は、親戚ではなく仇の家に入ってしまった。五穀の倉ではなく毒の家に入ってしまった[11]。ニゼと穴熊は、ムルスズ、クザナム[12]、ナチツォブ[13]の前で、けしかけて言った。ドゥゾアルが、アセミウァを殺し、うつ伏せに地に埋めて、埋めたところに糠を撒き、糠には溝を引き、溝には水を流し、こうして埋めた。ドゥゾアルは、あらゆる者に溝を整えさせた。ニゼ 、穴熊、烏に溝を整えさせた。烏は溝を整えず、人類の住む広大な土地、人煙の出たところに行き、祭りに集まった。ムルドゥズは、昼に溝を整えないと言って、掌を三度打ち、足の裏を三度踏み、ニゼと穴熊を、下に追い払った。足の白いニゼには水をやらず、白い風を吸うようになった。前足の白い穴熊は、下に追い払

---

[10] 他のテクストでは、このくだりには詳しい描写がある。①では、「太陽が坂の後ろに沈む頃、ムルドゥズが溝を見に来ると、烏が飛んできてムルドゥズに言った。ニゼと穴熊は溝を掘らせても掘らず、私は溝を掘り疲れて死にそうなほど。足を洗っても白くならない。あることないことを言った。ニゼは溝を掘らせても掘らず、空中を舞い、と。穴熊は溝を掘らせても掘らず、煙を口で舐め、と。」とする。②では、「私は溝を掘っても掘り終わらない、足を洗っても白くならない。苦しくて死にそうだ。ムルドゥズの前に、あることないことを言った。ニゼは溝を掘らず、ニゼは黒鷹の伴。穴熊は溝を掘らず、穴熊は煙を吸う。」とする。③では、「夜になると、烏は泥だらけになり、ムルドゥズのところに行った。言葉だけは烏が早かった。私、烏に溝を整えさせ、溝は立派にできた。ニゼに溝を整えさせ、溝は上手にできなかった。ニゼは足を洗いに行き、足を洗って足が白い。」とする。

[11] このくだりも、他のテクストの方が詳しい。①では、「ニゼの背を棒で打ち、ニゼに飯をやらず、ニゼが冷たい風を吸うのは、その由来がここに出た。穴熊の背を棒で打ち、穴熊に飯をやらず、水を飲むとき舌を巻くのは、その由来がここに出た。風を吸う鷹と穴熊は怒り、仇の籬を飛び越えた。仇でないのに、仇の籬を飛び越えた。親戚でなく仇の家に入って行った。麦でなく毒の籬を飛び越えた。」とする。②では、「ムルドゥズは是非を分けず、ズシャ［不詳］の細い棒を折り、ニゼを下に追い払い、ニゼに飯をやらない。口で冷たい風を吸うのは、その由来がここに出た。穴熊を下に追い払い、穴熊に飯をやらなない。穴熊が水を飲むとき舌を巻くのは、その由来がここに出た。ニゼ、穴熊は、怒りで仇の籬を跳び越えた。仇の家に入った。身内が怒って仇の家に入った。麦が怒って毒の籬を跳び越えた。」とする。③では、穴熊は登場せず、「ムルドゥズは、本当だと思い、ニゼを棒で打ち、下に追い払った。ニゼが白い風を吸うのは、その由来がここに出た。……」とする。

[12] ①・②では、クズタユ（Keezzeederyeq）とする。タ（derq）の悪霊の父であるという（和発源・習煜華・王世英・和力民選編 1983,p.18）。

[13] 原文は、Nazheezolbbu。悪霊の王の一人。スの側の頭目の名前。

い、穴熊が水を飲むときは、舌の先で舐めるようになった。これらの由来がここに出た。斑（まだら）のニゼを、穢れの悪霊の祭りに捧げるのは、その由来がここに出た。ニゼと穴熊は、親戚でなく仇の籬を跳び越えた。

〔第十三葉〕

ニゼと穴熊は、ミマサテ、クザナムに向かって言った。アセミウァはドゥが殺した、と。ミマサテは泣き、クザナムは泣き[14]、クトゥタユ[15]は泣き、ムルスズは泣いた[16]。ムルスズが言うには[17]、スの息子は九人、スの娘は九人出たが、アセミウァのような者が、また一人出ることはない、と。一日に千人に会い、一夜に百人に会っても[18]、アセミウァのような者に、また一人会うことはない、と。ムルスズは、飯を与えても飯を食わず、水を与えても水を飲まなくなった[19]。ミマサテ、ムルスズ、ナチツォブの三人は相談した。有能でない者は殺されず、悪くない者は捕らえられず。ムルスズは、ドゥの地に鋭い刀で仇を探そう、と。蝶が木を動かすように、と[20]。ムルスズは、心が熱く湧いてきた。その由来はここに出た。スの兵、ドゥの悪霊[21]の兵、ツェの悪霊の兵は勇敢に立ち、一千一万のタの兵、ラの兵は勇敢に立ち、ムルドゥズの地に進もう、と。ミマサテ、――

---

14 ①では、「ミマセテは泣き、クザナムは心痛み、肝は痛んだ。」とする。②では、「ミマセデとクザナムは、目に涙が出た。心痛み、肝は痛んだ。」とする。

15 原文は、Keedvqderqye。①のクズタユ（注 12）に同じ。

16 ①・②では、「ムルスズは泣いた。クズタユは泣いた。ナジツォブは泣いた。」とする。

17 ①・②では、「ミマセデとムルスズが言うには」とする。

18 ②では、「千日百月が経っても」とし、数字が月日になっている。

19 ①・②では「アセミウは飢えても飯を得られず、渇いても水を得られず、と。」とし、餓える主体が殺されたアセミウのことになっている。

20 他のテクストはより詳しい。①では、「ミマセデ、クザナムは相談し、クズタユ、ナジツォブは相談し、ドゥ（Ddvq）の悪霊とツェ（Zeiq）の悪霊は相談し、シチロタ（Sheecilloqdal）、ムルスズ、クザナムは相談して決めた。九十九［漢語訳は九千九百とする］のスの兵で、スの恨みをドゥの地に探す、と。ドゥゾアルを殺し、ドゥゾアルの、手には手錠をかけ、足には足枷を嵌め、連れて来い、と。蝶が木を動かすように、と。」とする。③では、「……肉親の恨みを仇に探すのだ。蝶が木を動かすように。」とする（漢語訳では、「千万の蝶が大樹に停まる」という意味に解釈している）。

21 原文は、Ddvq。ツェと対になる悪霊。本稿ではドゥ（Dduq）と区別するため、「ドゥの悪霊」と表記する。

〔第十四葉〕

――ムルスズ、ナチツォブの三人が相談し、三本のモミを伐り、一千一万の矛の柄が出た。三本のツツジの大木を伐り、一千一万の黒土の斑の鞘(さや)が出た。三本の竹を伐り、一千一万の燕の羽の矢が出た。スの黒ヤクを潰し、ヤクの角を切り、一千一万の弩弓が出た。ミマサテの心と気が変化して、天から九つの白い鉄鉱石が落ちてきた。スのタラブクズ[22]が打ち、鷹が飛ぶような火花を出して打った。ミマサテの心と気が変化して、炭のように黒い鶏が一羽出た。炭のように黒い鶏の羽を抜き、一千一万の羽のついた矢がここに出た[23]。矛の柄は生い茂る麻のように、大刀は落ち葉のように、三叉槍(みつまた)は蛇が這うように、鋭い矢は蜂が飛ぶように、ジュァルゥア大山が崩れるように。ムルスズは変化を起こし、一千一万の有能なスの兵を起こし、――

〔第十五葉〕

――飛べる悪霊は飛び、跳べる悪霊は跳び、天の数多の星の如く、地に蜂が飛ぶが如く。ムルドゥズの地、天と地を埋め尽くす、と[24]。ムルド

---

[22] 原文は Tallabbuqgvzzeeq。鍛冶の名前という。その関係は定かではないが、名前の前半の Talla は、他のテクストに見える Tillo（夭折の悪霊）と同じと考えられる（次の注 23 参照）。後半の bbuqgvzzeeq は、「豚の頭が生えた」の意味。

[23] このくだりも他のテクストはさらに詳しい。①では、「スが変化して、上に一つの黒い石が出て来た。ムルスズの一千一万の悪霊が起きて来た。ミマセデ、クザナムが相談し、クズタユとナジツォブが相談し、スが三本のモミの木を伐り、一千一万の鋭い矛を作り、三叢の藤を伐り、一千一万の刀を作り、黒いズと黒いヤクを潰し、ヤクの角の弓を作り、ヤクの皮を糸にして、一千一万の弓を作った。スの鍛冶が白い鉄の兜を打ち、一千一万の良い兜が出来た。スの炭のように黒い鶏が、一千一万の鋭い矛と鋭い矢を作った。」とする。②では、「ムルスズは、上に一つの黒い石を立て、変化を起こした。一千一万のスの兵を起こした。ミマセテ、クザナムが相談し、クズタユ、ナジツォブが相談し、ムルスズの三本のモミを伐り、一千一万の鋭い矛を作り、三叢の藤を伐り、一千一万の鎧兜が出た。スの黒いズと黒いヤクを潰し、ヤクの角の弓を作り、ヤクの皮を糸にして、一千一万の弓が出た。ムルスズの人の、スの人パユラドゥァゾが、スの頭を鉄の俎板にして、スの手を火鋏にして、鷹が飛ぶような火花を出して、一千一万の白い鉄の帽子、白いジュラ［不詳］の兜、赤い鎧兜を作った。スの炭のように黒い鶏が変化して、一千一万の鋭い矢と鋭い矛がここに出た。」とする。一方、③では「三本のモミを伐り、一千一万の先の白い矛とし、三叢の藤を伐り、一千一万の鎧兜とし、黒いズと黒いヤクを潰し、ヤクの角を弓とし、ヤクの皮を糸にした。スの豚の頭のティロ［Tillo,Tillua とも。夭折の悪霊。］は、弓と矛を打ち、白い鉄の兜を打ち、鋭い刀を打ち、炭のように黒い鶏を潰して、矢の羽とした。」とし、やや簡潔になっている。

[24] ①ではさらに詳しく、「ムルスズの一代、天の数多の星のように、地の数多の草のように、

ゥズは、悪い夢を見た。ドゥの村が火に覆われる夢を見た。ツツジムは悪い夢を見た。ドゥの地が肥えに燻されるのを見た。ドゥの息子、ドゥの娘が死ぬ夢を見た。スの黒ヤクが、タラアパ山[25]で、角を擦り角を研ぐのを夢に見た。天の真ん中で、雷が鳴るのを夢に見た。地の真ん中で、地鳴りがするのを夢に見た。黒い豹、黒い虎がドゥの地を跳ぶ夢を見た。黒い鶴、黒い鷹がドゥの地を飛ぶ夢を見た[26]。ムルドゥズは、心穏やかでなくなった。ドゥの白い雲、白い風に、スの地を見に行かせた。スの黒い雲、黒い風が、雲を覆い隠した。ドゥの目の良い見張り[27]に、スの地を見に行かせた。スの地蜂が、その目を眩(くら)ました。ムルドゥズは、少し負けた。ドゥの白い鶴、白い鷹に、スの地を見に行かせた。スの黒烏(からす)が遮り、スの地を見せなかった。ドゥの耳の良い見張り[28]に、スの地を聞きに行かせた。スの目の良い見張りが遮り、スの地を見せなかった。スは、天の数多の星のようになり、地に蜂が飛ぶようになり、矛の柄は生い茂る麻のようになり、――

矢は蜂が飛ぶように、弓は星が落ちるように、スの兵一千一万が、飛べる者は飛び、跳べる者は跳び、天と地を埋め尽くした。スの兵シツレタは、鋭い矛を手に持ち、ナチツォブは固い鎧兜を着て弓矢を手に持ち、スの軍官が先に出て、タの悪霊の兵、ラの悪霊の兵、ドゥの悪霊の兵、ツェの悪霊の兵、ドゥの悪霊の兵ロテュグニャ、ツェの悪霊の兵ロバチデ、ム［水怪］の悪霊の兵、ウ［女の水怪］の悪霊の兵が、ドゥの地、ドゥの家に、もう着くばかりとなった。」とする。②もほぼ同様である。③では、「ミマセテが変化して、スの兵は飛べる者が一千出た。ニの兵は飛べる者が一万出た。天の星のように多く、地の草のように繁る。矢は蜂が移るように、投石器は星が落ちるように、天地を埋め尽くした。」とする。

25 原文は、Talla'aiperqjjuq。ドゥの地の山という。

26 ①では、「ムルドゥズは、昼に悪い考えがよぎり、夜に悪い夢を見た。ドゥの家が火で燃える夢を見た。チュチュッジムは悪い夢を見た。ドゥの地が水に流される夢を見た。セチュッカム［ムルドゥズの娘］とドゥゾアルは悪い夢を見た。ドゥの家が風に飛ばされる夢を見た。ドゥの白い山、白い崖で、スの黒ヤクが、角を研ぎ角を擦る夢を見た。ドゥの天、ドゥの地が火に呑まれる夢を見た。黒い豹、黒い虎、黒い鶴、黒い鷹の禍が、ドゥの地に放たれた。」とし、より詳細である。②もほぼ同様である。③では、「……チュチュッジムは、私も夕べ悪夢を見た、と。ドゥの地が肥えに浸かる夢を見た［ただし、漢語訳では、「至る所で洪水が起こったのを夢に見た」と修正］。スの黒ヤクが、ドゥの崖で、角を擦り研ぐのを夢に見た。」とする。

27 原文は、liuqlo mieqtal。「目が良く、目の仕事をする者」の意味。

28 原文は、mi'lo heital。「耳が良く、聞く仕事をする者」の意味。

〔第十六葉〕

――大刀は落ち葉のようになった[29]。ムルドゥズとツツジムの二人は相談し、一千一万のスの兵とドゥの悪霊の兵が、まだここに着いてはいないが、ムルドゥズが言うには、父は天の種族である、良き伯父は天にいる。山の上に隠れよう、と[30]。ドゥゾアルが言うには、母は湖の種族である。湖の中に隠れよう、と。ドゥゾアルは湖の中に隠れた[31]。ドゥの良き宝、良き穀、金銀、トルコ石と黒水晶を持ち、山の崖の上に置いた[32]。ツツジムは、家にいさせた。九十九の禍があれど、妻には禍がない[33]。スがムルドゥズは何処に行ったと聞いたら、指は山を指してはいけない。ドゥゾアルは何処に行ったと聞いたら、目は湖を見てはいけない。三日目の朝、一千一万の有能なスの兵を起こし、ナチツォブが起き、クトゥタ

---

29 ①では、「ムルドゥズは、心穏やかでなく、〜神の目の良い白風の哨兵にスの地を見に行かせた。スの黒い風が追い払った。ドゥの白い風はドゥの地へ戻ると、スの地では、鋭い大刀、鋭い小刀、鋭い矛、鋭い矢がもう天に満ち地に満ちている、と。ドゥの目の良い哨兵に、スの地を見に行かせた。スの手強い雀蜂が追い払い、ドゥの地へ戻された。ドゥの黄金の魚、黄金の目の良い蜜蜂の哨兵に、スの地を見に行かせた。スが蜜蜂と魚の舌を切り、蜜蜂は話せなくなり、ほうほうの体でドゥの地へ戻った。魚は話せなくなり、口先は腫れ（突き出て）ドゥの地へ戻った。ドゥの目の良い白鷹の哨兵に、スの地を見に行かせた。スの黒鷹が追い払い、ドゥの地へ戻った。ドゥの耳の良い者に、スの地を見に行かせた。スの目の良い者が見て、目の良いものが追い払い、ドゥの地へ戻された。スの矢は蜂の移るように、天の数多の星のように、地の数多の草のように。」とする。②もほぼ同様だが、「……魚は舌がなく、水を飲むのに嘴が腫れた（突き出た）。蜜蜂は舌がなく、ぶんぶんと言うばかり。」とする。一方、③の漢語訳では、①・②で「哨兵」と解釈されている dvzheeq を、「目の利く“都知”」とし、漢字で音を記して特殊な名詞と解釈する。これは現代のナシ語では使われないものと思われるが、文脈からは「偵察」の意味に思われる。また、蜜蜂の次に bbuqbbai（スズメバチ）を行かせるくだりは、漢語の訳にはない。現在のナシ語では、bbuqbbai（豚－蜂）は“大土蜂”もしくは“野蜂”を指すが、このくだりではスに針を切られ、それが今でも針がないことの由来となっている。おそらくこのテクストにおける bbuqbbai とは、針がない蜂によく似た昆虫を指すのであろう。この部分の漢語訳が省略されているのもこのためかと思われる。

30 ①・②では、「……ムルドゥズは逃げて天上に到った。」とする。

31 ①・②では、「ドゥゾアルは、伯父が湖の中におり、湖の中に隠れた。」とする。

32 ①では、「セチュッカムは、ドゥの白い崖に座り、ドゥの息子のイククコ［Yigvqkeeqkul］は、良き宝、穀、金銀、トルコ石、黒水晶を、ドゥの山の崖に隠した。」とする。③では、「ドゥの息子たち、ドゥの娘たちは、九種の金銀、良い宝を、山の崖の中に隠すのだ。」とする。

33 ①では、「ツチュワジムが言うには、女には九十九の禍はない。七十七の禍もない。私には禍はない。スが戦争をしたとしても、私は殺さないはず、と。（ツチュッジムは）家の中にいた。」とする。②もほぼ同様。③では、「九千九の禍あれど、妻に禍はなし。七十七の禍あれど、妻に禍はなし。妻は殺さないしきたりだ、と。私は門を守り、門を見張ろう、と。」とする。

ユが起き、ドゥの悪霊の兵、ツェの悪霊の兵を起こし、翼の生えた鶴の兵、鷹の兵を起こし、模様のある豹の兵、虎の兵を起こし、角の生えたズとヤクの兵を起こし、――

〔第十七葉〕

――ムルドゥズの地に着いた。ドゥの兵、ドゥの馬がスには見えず。ムルスズが言うには、ツツジムよ、ムルドゥズとドゥゾアルは何処へ行った、と。ツツジムは、妻は心弱く、言ってならぬことを言った。ムルドゥズは何処へ行ったと言われ、指は山を差した。ドゥゾアルは何処へ行ったと言われ、目で湖を見た。ムルスズの心は、湖に向かった。一千一万のスの兵が、弓の射れる者が山を射り、山を射れども跡もなし。斬れる者が湖に斬り、湖に斬れども跡もなし。スの兵が有能たれども、なす術はなし[34]。スの女、マタクザナム[35]が言うには、私が銀の衣、金の衣

---

[34] このくだりは、①ではより詳しい。「三日目の朝、一千一万のスの者が、ドゥの地に着いた。シジレタ［Sheeqrhee'leiqdaq］は、鋭い矛を手に持ち、ナチツォブは鋭い大刀を手に持ち、クズタユは弓矢を持ち、ハラチブ［Ha'lacheebbv］は、鋭い矛を手に持ち、ロテュグニャ［Loqdiuggvniel］は、細縄を手に持ち、ロパジデ［Loqbazziddei］は斧を手に持ち、一千一万のスの者が、ドゥの地に放たれ、黒い鶴、黒い鷹、黒い豹、黒い虎、黒いズ、黒いヤクがドゥの地に満ちた。ドゥの者、ドゥの馬は一人一頭もいなかった。ムルスズ、クズタユは、ツチュゥジムに言った。ドゥの家にドゥの者はいないのか。ツチュゥジムは、指で湖を指し、湖にはいない。指で山を指し、山にもいない。スの兵が言うに、ツチュゥジムを殺そう、と。ツチュゥジムが言うに、ドゥゾアルは、伯父の湖の中にいる。湖の中に隠れた。ムルスズは、ドゥゾアルを殺すと言って、湖の中に矢を放ち、鋭い矛を湖に投げ入れた。ドゥゾアルは殺せず。」とし、ツチュゥジムが脅迫される描写が加わっている。②もほぼ同様だが、「……ムルスズ、クズタユは、ツチュゥジムに言った。お前の家のドゥゾアルは家にいないのか、と。」として、ドゥゾアルだけを探している。③では、さらに描写が具体的である。「三日目の朝になり、ガジツォブは鋭い大刀を握り、クトゥタユは鋭い矛を担ぎ、ミマセテは三叉槍を持ち、ドゥの悪霊の兵、ツェの悪霊の兵を後に従え、黒い鶴、黒い鷹が天を埋め尽くし、黒い豹、黒い虎が山を埋め尽くし、スの兵は、ドゥの地に仇を探しに来た。……ドゥの者はおらず、ドゥの馬はおらず。スの兵、ニの悪霊の兵はみな、ツチュゥジムを苦しめた。引きずり引っ張り、叩いて打った。ムルドゥズは何処に行った、ドゥの息子、ドゥの娘は何処へ行った。ドゥゾアルは何処へ行ったのだ、と。ツチュゥジムは、馬鹿を装った。恐れているのを装った。目は湖の中を見て、ドゥの兵は湖にはいない。指は崖を指して、ドゥの兵は崖にはいない、と。スの兵、ニの兵はなす術なく、縄を縒ってもきつくできない。」最後の一句は漢語訳では意訳となっているが、原文は以下の諺（和潔珍編訳 2009,p.19）に基づく。「やっても上手くいかず、縒ってもきつくできない。」(Bbei lei perq ggv me niq, bbiq lei ssvl me niq.)。

[35] ①、②、④ではクザナムに同じ。③では女性の名をムタカムミ（Mvqdagelmumil）とし、これはムルスズの妻ではないように思われる。ムタカムミは、アセミウァが、ドゥゾアルに

を着て、黄色い竹笛を吹き、黄色い竹の口琴[36]を鳴らせば、男の心は女にあり、と。犬の心は獣にあり、と。ドゥゾアルは、得られなければ諦められない。私が誘ってきましょう。有能なスの兵は戻りなさい、と。一千一万のドゥの悪霊の兵、ツェの悪霊の兵、タの悪霊の兵、ラの悪霊の兵は戻りなさい、と[37]。スの女、マタクザナムは、――

〔第十八葉〕

――顔は銀の顔、金の顔。ドゥの天、ドゥの地には、スの者、スの馬はいなくなった、と。スの女、マタクザナムは、髪を洗い、髪を梳くふりをして、ドゥの白い湖で、手を洗い、顔を洗いに行った。犬の心はみな獣にあり。男の心はみな女にあり、と。スの者、スの馬はここにいなくなった、と。一羽の白い鷹となり、天を三度回りにおいで、と。スの者、スの馬はここにいなくなった、と。太陽が坂に沈む頃、恐れるように、恐れぬように、ドゥゾアルはドゥの白い湖の中に座り、なす術がなかった。夜の明ける頃、太陽の光が射す頃、スの女、マタクザナムは、ドゥの白い湖の中に座り、髪を洗い、髪を梳きに行った。手を洗うふりをして、胸の白い乳房を見せ、足を洗うふりをして、膝と腿を見せた。口では歌を口ずさむ[38]。犬の心はみな獣に置きなさい。男の心はみな女に置きなさい。ドゥの天とドゥの地には、スの者とスの馬はいないのだよ、と[39]。ドゥゾアルの魂が変化して、白い一羽の鷹となり、天を一回り飛ん

スの天地を拓けば与えるとしたスの美女である（和志武 1987,p.14、和志武翻訳 1994,p.5/p.35）。

36 原文は kukuq。ナシ族には竹製の口琴が伝わり、かつて男女の交際に使われていた。一本のみのものや、音程を変えた三本組のものがある。

37 ①では、「ムルスズは術がなく、ムルスズとクザナムは相談し、銀の衣、金の衣、トルコ石の衣、黒水晶の衣を与え、白い銀の腰帯、黄金の腰帯をクザツム［原文は Geessacilmu。クザナムとは、名前の一部にずれがある。］に与えた。有能な良い男は良い女が誘う。良い獣は良い犬が誘う。ドゥゾアルは得ずにいられず、娘が誘う。スのドゥの悪霊の兵、ツェの悪霊の兵はムルスズのところに戻った。」とする。②もほぼ同様。③では、「スのムタカムミが言うには、男は良い娘を好む。獣は犬が誘う。ドゥゾアルは、私が連れてこよう。全てのスの兵は、戻りなさい、と。」とする（注 35 参照）。

38 原文は、zzer ssee hoq ssee。「歌ったり歌い合ったりする」という意味（和学光 2013,p.123）。若い男女の交際に行われる歌の掛け合いを踏まえた表現である。

39 ①ではさらに詳しく、「クザツムは、銀、金、トルコ石、黒水晶の服を全身に身に付けた。あらゆる良い女が歩かない場所はなく、あらゆる良い馬が行かない場所はない。クザツムは、

だ。マタクザナムの魂が変化して、一羽の黒い鷹となり、天を一回り飛んだ。二羽は天で交わった。ドゥの天、ドゥの地に、スの者とスの馬はいないのだ、と。太陽が山坂に落ちる頃、恐れるように、恐れぬように、湖に隠れた。朝の光が見える頃、マタクザナムは、ドゥの白い湖で、髪を洗い、髪を梳きに行った。手を洗うふりをして、胸の白い乳房を見せ、足を洗うふりをして、膝と腿を見せた。

〔第十九葉〕

犬の心を全て獣に置きなさい、と。男の心を全て女に置きなさい、と。ドゥゾアルの魂が変化して、一頭の白い虎となり、峰で一跳び。マタクザナムの魂が変化して、一頭の黒い虎となり、峰で一跳び。二頭は峰で交わった。太陽が山坂に沈む頃、恐れるように、恐れぬように、湖に隠れた。朝の光が見える頃、スの女、マタクザナムは、ドゥの白い湖の畔に座り、髪を洗い、髪を梳きに行った。手を洗うふりをして、胸の白い乳房を見せ、足を洗うふりをして、膝と腿を見せた。犬の心を全て獣に置きなさい、と。男の心を全て女に置きなさい、と。ドゥゾアルの魂が変化して、一頭の白いヤクとなり、高原で一跳び。マタクザナムの魂が変化して、一頭の黒いヤクとなり、高原で一跳び。二頭は高原で交わった。ドゥゾアルは、湖から出て来た。ドゥゾアルとマタクザナムの二人は、一日中一緒にいて、太陽が沈むのも知らず。一晩中一緒にいて、鶏が鳴くのも知らず。ドゥゾアルは、マタクザナムの働く伴侶となり、高

ドゥの白い湖の畔で、ドゥゾアルを誘いに来た。スの者を恐れることはない、スの馬を恐れることはない、と。ドゥゾアルよ、湖から上がっておいで、と。ドゥゾアルは有能で、とても良い女が誘う。機敏な獣は、とても良い犬が誘う。ドゥゾアルを誘った。クザツムは、ドゥの白い湖の畔で、髪を湖の中で洗い、白い手指を湖の中で洗い、白い乳房を湖の中で見せ、白い足を湖の中で洗った。三日目の朝、ドゥゾアルは湖から上がっておいで、スの者、スの馬を恐れることはない、と。」とする。②も① とほぼ同様だが、ドゥゾアルを誘い出すのに、さらに時間がかかるように描写する。また、③では、細かい描写とドゥゾアルへの問いかけがあり、「ムタカムミは、白い銀色の美しい衣を着て、トルコ石色の美しいスカートを穿き、黄金の帯を締め、湖の畔に座った。黄色い竹の口琴を弾き、良い娘の心は男にある、と。良い男の心は、娘にはないのですか。良い犬の心は、獣にあるならば、良い獣の心は、犬にはないのですか。愛しきドゥゾアルよ、スの兵は戻って行った。スの者はいない、スの馬はいないのだよ、と。」とする。

原に羊を放つ伴侶となった[40]。スの女、マタクザナムが言うには、我ら二人、天を開き地を拓くこの地に住むのは良くない、と。下のあの地に行かねば、と。――

〔第二十葉〕

――天はトルコ石で開き、地は金で開く。木には銀の花が咲き、石には金の花が咲く。銀の犬が吠え、金のひよこが鳴くところがある、と。その地に行かねば、と。ドゥゾアルが言うには、祖先の代も孫の代も、一千一万の目の利く占い師が見るに、ドゥの地でなければ、そのような地は見たことがない、と。スの女、マタクザナムが変化して、天はトルコ石で開き、地は金で開く。木には銀の花が咲き、石には金の花が咲く。銀の犬が吠え、金のひよこが鳴いた。ドゥゾアルは、恐れるように、恐れぬように、マタクザナムが連れて行った。その地に着いた。天は銀で開き、地は金で開く。木には銀の花が咲き、石には金の花が咲く。銀の犬が吠え、金のひよこが鳴く、その地を見に行った。銀の角が生えた白い鹿、金のたてがみの麝香鹿(じゃこうじか)[41]の地に、天を開き地を拓きに行かねば、と。ドゥゾアルが言うには、祖先の三代、銀の角が生えた白い鹿、金の

---

40 ①では、「ドゥゾアルは、ドゥの白い湖の畔に出てきた。ドゥゾアルの魂が変化して、白い一羽の鷹となり、ドゥの天地を三回回った。……昼と夜となく、恐れるように、怖がるように。ドゥの白い湖の中に隠れた。次の日の朝、……クザツムは、髪を湖の中で洗い、白い手指を湖の中で洗い、白い乳房を湖の中で見せ、白い足を湖の中で洗った。ドゥゾアルは、クザツムが足を洗い、手を洗うところに来た。ドゥゾアルの魂が変化して、白い一羽の鷹となり、クザツムの魂が変化して、黒い一羽の鷹となり、白鷹と黒鷹の二羽は、空で遊んで羽ばたいた。ある日になると、夜と昼とを問わず、スの人、スの馬は恐れるに及ばず。恐れるように、怖がるように。ドゥの白い湖に隠れた。クザツムは、次の日の朝、ドゥゾアルが良い男なら、とても良い女が誘う。賢い獣は、とても賢い犬が誘う。クザツムは、髪を湖の中で洗い、白い手指を湖の中で洗い、白い乳房を湖の中で見せ、白い足を湖の中で洗った。スの人、スの馬は恐れるに及ばず、と。……［この後は繰り返しの描写が続き、二人ともまた鷹になる。さらに繰り返し、二人とも虎になる。さらに繰り返し、二人ともヤクになる。］……ドゥゾアルとマタクザツムの二人は、日が出ると共に座り、日が暮れるのも知らず、月が出るとともに寝て、真夜中に鳥が鳴くのも知らず。」とさらに詳しく描写するが、④・⑤とは異なり、動物になって交わる描写はない。②も①とほぼ同様である。一方、③では、「ドゥゾアルの魂が変化して、一羽の白い鷹になり、ドゥの地を三度回った。スの人はおらず、スの馬は見えず。ドゥゾアルは、湖に隠れてしまった。」とする。最初はすぐに海に隠れる方が、自然な流れと思われる。

41 原文は、yimei。④では「野牛」となっているが、⑤では「山驢（ジャコウジカ）」に修正されている。

たてがみの麝香鹿を見たことがない。女の言葉は信じられないというが、これは信じられる言葉だ、と。ドゥゾアルは、信じたようだ。スの女、マタクザナムが連れて行った。――

〔第二十一葉〕

――こうして下の地に着いた。スの女、マタクザナムが言うには、木が生えて歩くことが出来る地、石が割れて話すことが出来る地[42]がある、と。引き連れて下の地に着いた。木が生えて歩くことが出来、石が話すことが出来るのを見に行った。ドゥゾアルが言うには、祖先の三代、木が生えて歩くことが出来、石が話すことが出来るのを見たことがない、と。女の言葉は信じられないというが、これは信じられる言葉だ。スの女、マタクザナムは、ドゥの白い雲、白い風に悟られないよう、スの黒い雲、黒い風に伝えさせた。ドゥゾアルは、ドゥの地に戻るのはもうできない。スの地、火の悪霊の地、穢れの地に着いた。ドゥゾアルは、スの女、マタクザナムに連れられて、こうして下の地に着いたのだ。ドゥゾアルは、ヤクが誘われるように、悪霊に誘われたのだ[43]。三日目の朝に

---

42 このフレーズは、天地開闢以前の状態を描写する言葉として、創世神話が語られる経典『ツォバトゥ（Coqbbertv）』の冒頭にも見られる。

43 ①では、さらに詳しく段階を追って、少しずつドゥゾアルを信じ込ませるプロセスが描かれている。「クザツムが言うには、私たち二人は、天の星のような地で、草のように一家をつくりに行こう、と。働いて家畜を放牧するこの地に住んではいけない。クザツムが言うには、ドゥゾアルと私の二人、天はトルコ石ででき、地は金ででき、木に銀の花が咲き、白い銀のひよこが鳴き声を出し、石には金の花が咲き、金の子犬が鳴き声を出す、その地に天を開き、地を拓きに行こう、と。ドゥの祖先、祖父の代、一千の目の利く占い師がいたが、……このようなことは見たことがない。……クザツムが言うには、銀の角が生えた白い鹿が跳ぶ地、金のたてがみの麝香鹿が跳ぶ地がある、そこに行こう、と。ドゥゾアルは、私の祖先の代、一千一万の白の目の利く者がいたが、……聞いたことがない。……クザツムがドゥゾアルを連れて、一つの坂の辺りに着いた。引き連れて下の地に着いた。クザツムが変化して、銀の角が生えた白い鹿、金のたてがみの麝香鹿がいる地に着いた。クザツムが、ドゥゾアルに言うには、私たち二人、この天地に住んではならない。木が生えて歩くことが出来る地、石が割れて話すことが出来る地がある、と。ドゥゾアルが言うには、私の祖先の代、一千一万の白の目の利く者がいたが、……聞いたことがない。……クザツムが引き連れて、一つの坂の辺りに着いた。引き連れて下の地に着いた。クザツムが変化して、木が生えて歩くことが出来る地、石が割れて話すことが出来る地に着いた。ドゥゾアルは、そうであると思い、本当であると思った。ドゥゾアルは、クザツムが連れて、白と黒の接する境の地に着いた。」とする。②・③もほぼ同様である。

なり、ムルスズ[44]、ミマサテ、ナチツォブ、クトゥラユの四人は相談し、捉える手の速い悪霊を遣わし、歩く足の速い悪霊を遣わし、持つ力の強い悪霊を遣わし、飛べる悪霊、跳べる悪霊を遣わし、――

〔第二十二葉〕

――ドゥゾアルは、有能なドゥの悪霊の兵、ツェの悪霊の兵、一千一万の有能なスの兵により、首を捕らえられ、怒りに心苦しんだ。ムルスズは、ドゥゾアルの耳を三度平手で打った。ドゥゾアルが言うには、眠りから覚めれば、父に会っていたのは夢だった、と。心の黒い者に出会ってしまった。悪い雨、悪い雹をやり過ごすことができなくなった、と。ドゥゾアルは、手に手錠を掛けられ、足には足枷をはめられ、銅の刺、鉄の刺の上を牽かされて行った[45]。九つの大きな坂を越え、九本の大木の傍を過ぎ、九つの大河の傍を牽かれて行った。堅牢な銅の牢、鉄の牢の中に閉じ込められた[46]。爪が生えているものでは犬が最も早かった。村の真ん中を犬が守った。鰭が生えているものでは魚が最も早かった。村の末を魚が守った。角が生えているものでは山羊が最も早かった。村の先を山羊が守った[47]。スの女、マタクザナムが、飯を与えさせた。ナイセトゥ[48]に、門を守らせ、門の敷居の傍で見張らせた。

---

44 原文では、ムルドゥズとなっているが、誤りである。トンバ文字では、ムルスズの文字が見える。

45 ちなみに、①と②のトンバ文字では、閉じ込められた牢に刺が刺さっている。

46 ①では、ドゥゾアルが捕まった様子が詳しい。「……ドゥゾアルは、目には大粒の涙が出て、涙を手で拭き、大きな湖のよう。クザツムが言うには、良い男に大きな禍が出た。仇は怒りで許さない、と。……牽かれてスの地へ至った。……スのニチクワ［Nicikeewe］の黒い鉄の門の城に入れられ縛られた。銅の刺、鉄の刺の塞に打ち付けられた。」とする。③では、クザナムがドゥゾアルを慰めている。「ムタカムミが言うには、大きな雷は雨が降らない。大きな禍は収めやすいという、と。」とする。

47 ①では、「角のある痩せた山羊が村の先を守り、牙の生えた痩せた犬が村の真ん中を守り、鰭の生えた痩せた魚が村の末を守る。スの黒い門は、マブウァルが守る。ドゥゾアルを閉じ込めた。」とする。②では、「村の末には銅の刺、鉄の刺を挿し、角のある痩せた山羊が村の先を守り、牙の生えた痩せた犬が村の真ん中を守り、鰭の生えた痩せた魚が村の末を守る。マブウァルが黒い門を守る。」とする。

48 原文は、Naqyilseiltv。牢屋の番人の名前。

〔第二十三葉〕

三年と三月と三日が過ぎ、ドゥゾアルとスの女、マタクザナムの二人は交わって、白い銅と白い鉄を支えにして、ドゥゾハパ、スミサチャ[49]の二人が生まれた。スの女、マタクザナムが言うには、ドゥゾアルと私の二人に、一男一女が生まれた、と。マタクザナムが言うには、もうこの天は開いてはいけない。この地は開いてはいけない[50]、と。もう高原に羊を放つ伴侶にはなれない、と。もうこの天とこの地に住むことはできない、と。ナイセトゥが、門と敷居を見張るのはもうできない、と。ナイセトゥは、ミマサテのところで、けしかけて言った。客がいるのが長くなれば、主人は付き合いきれない。小さな松の木が生えれば、坂は整わなくなる、と。

〔第二十四葉〕

松の林に白い麑（きょん）、家畜の種にはなれない、と。仇をつなぐのが長くなれば、仇は逃げるかもしれない、と。ドゥゾアルが言うには、必要ならば殺せ、殺さなければ帰るのだ、と[51]。ミマサテ、ムルスズの二人は相談

---

49 原文は、Dduqssohalba、Svqmilsaiche。Dduqsso は「ドゥの息子」、Svqmil は「スの娘」の意味。①では子の名前が異なり、ハブロチとハブロサとする。③ではさらに異なり、ハバロブとハバロムとする。

50 天を開き、地を拓き、このままここに住み続けることはできないという意味。

51 ①では、子供たちの言葉が牢の番人に聞かれたことになっている。「……翌日の朝、クザツムの養うハブロチとハブロサが言うには、父は骨であり母は肉である［ナシ族の親族概念では、父系を骨、母系を肉と捉える。］、骨と肉が同じではない。白い天、白い地に住みに行こう、と。白い天、白い地で、働いて家畜を放ちに行こう、と。マブウルがこれを聞き、ムルスズとナジツォブが言うには［原文ではムルスズとナジツォブが言ったことになっているが、以下のセリフはマブウルがムルスズとナジツォブに伝えた言葉であろう。］、ドゥゾアルとクザツムの二人、客と主人の二人は、食べる時に対になって座ってはいけない。家畜と獣は、一叢の青草を食べてはいけない。ドゥゾアルは、足には足枷をはめ、手には手錠を掛け、鉄の柱につながれている。昼は見張っても、夜には逃げ出すかもしれない。殺すなら殺す時が来た、殺さないなら放つ時が来た。」とする。②では、男の子の名前がやや異なり、見張りの名前も異なる。「……次の日の朝、ハブルゥァパとハブルゥァサが言うには、金の魚の我ら二人、骨は父の骨、肉は母の肉。骨と肉は同じではない。白い天、白い地で二人で一家となり、高原に羊を放ち、働く伴侶となろう、と。マブウァルがこれを聞いた。……」とする。③では、「……ハバロブが生まれた。ハバロムが生まれた。昼は座って彼の傍におり、夜は寝て彼の傍におり。ハバロブとハバロムが言うには、父は骨であり、母は肉である。骨と肉は同じではない。骨の種は、白い地へ行こう、と。……ドゥゾアルは、鉄の柱につながれて、死ぬにも死なせない、生きるにも生きられない。ムタカムが言うには、……馬をつな

し、ナチツォブが起き、クトゥタユが起き、一千一万の有能なドゥの悪霊の兵、ツェの悪霊の兵を起こし、ドゥゾアルを、黒い湖の畔で殺そう、と。スの女、マタクザナムが言うには、ドゥゾアルは頭も顔も美しい人だ。顔に赤い血をつけてはいけない、と。スの女、マタクザナムが言うには、娘の心は彼の頭にある。頭を鍬(くわ)で打って殺してはいけない。娘の心は彼の心臓にある。心臓を矛で刺して殺してはいけない、と。悪霊が心臓を矛で刺して殺した。ナチツォブは、頭を鍬で打って殺し、クトゥタユは、肋(あばら)に矛を刺して殺し、ナイセトゥは、首に矢を射って殺した。

3. おわりに

本稿では、ナシ族トンバ経典『ドゥとスの戦い』の第十葉から第二十四葉までの翻訳と注釈を示した。続く第二十五葉以降については、稿を改めて公表する予定である。

［参考文献］

Rock, Joseph. F. 1963. *A Na-khi English Encyclopedic Dictionary, Part I.* (Serie Orientale Roma 28). Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

Rock, Joseph. F. 1972. *A Na-khi English Encyclopedic Dictionary, Part II. Gods, Priests, Ceremonies, Stars, Geographical Names.* (Serie Orientale Roma 28). Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

和発源・習煜華・王世英・和力民選編 1983『東巴経書専有名詞選』中国社会科学院世界宗教研究所・雲南省社会科学院東巴文化研究室・麗江東巴文芸研究室、1983 年 7 月。

和潔珍編訳 2009『納西諺語集』雲南民族出版社。

和開祥釈読・李英翻訳 1999-2000「除穢・董術争戦」『納西東巴古籍訳注全集 第 41 巻』雲南人民出版社。

いで長い日が流れた。馬も病になるだろう。仇をつないで長い日が流れた。恨みも生まれよう。殺すなら殺せ、殺さず放すなら放せ。」とする。

和正才講述・李即善翻訳 1963『懂述戦争（巻上）』麗江県文化館印、1963年 11 月 10 日。
和芳講述、李即善・周汝誠訳 1964『懂述戦争（巻下）』麗江県文化館印、1964 年 7 月 20 日。
和雲彩読経・和明信翻訳 1984『替身道場 董神与術神戦争之経』中国社会科学院世界宗教研究所・雲南省社会科学院東巴文化研究室・麗江東巴文芸研究室。
和雲章釈読・和品正翻訳 1999-2000「退送是非災禍・董争述闘」『納西東巴古籍訳注全集 第 36 巻』雲南人民出版社。
和学光 2013『納西語漢語詞典（試用）』麗江市納西文化伝習協会。
和志武 1987『DDUQ'AIQ SVQ'AIQ《納西東巴経之三》白黒争戦』雲南民族出版社。
和志武編訳 1983『納西東巴経選訳』雲南省社会科学院東巴文化研究室。
和志武翻訳 1994『東巴経典選訳』雲南人民出版社。
和志武・銭安靖・蔡家麒 2000『中国各民族原始宗教資料集成 : 納西族巻・羌族巻・独龍族巻・傈僳族巻・怒族巻』中国社会科学出版社。
和鐘華・楊世光主編 1992『納西族文学史』四川民族出版社。
和士成解読・和力民翻訳 1989「董術戦争」『納西東巴古籍訳注（三）』雲南省少数民族古籍整理出版規劃辦公室編（雲南省少数民族古籍訳叢 第 26 輯）雲南民族出版社。
和士成釈読・和力民翻訳 1999-2000「禳垛鬼儀式・董術戦争」『納西東巴古籍訳注全集 第 25 巻』雲南人民出版社。
李霖燦 1972 『麽些象形文字・標音文字字典』文史哲出版社（台北）。
李霖燦・張琨・和才 1978『麽些経典譯註九種』国立編譯館中華叢書編審委員会（台北）。